

# みらいの福祉施設建築プロジェクト助成施設における 地域交流の実態

— 幼老複合施設「深川えんみち」におけるケーススタディー —

日大生産工(院) ○菅澤 梨乃  
日大生産工 山岸 輝樹

## 1. はじめに

福祉施設建築は、社会の価値観や福祉政策の変化に伴い「収容・管理型」から「生活支援型」さらに「地域に根差した共生型」へと発展してきた。閉鎖的な施設が問題視される中、地域福祉拠点として施設の多機能化が求められている。しかし、施設を地域にどのように開くかについては、明確な答えがまだ得られていない。

本研究では、みらいの福祉施設建築プロジェクト助成施設を対象に、地域に開かれた新しい施設の設計計画と実現方法を明らかにする。本稿では、利用が開始された深川えんみちをケーススタディーとし、地域交流の実態を解明することを目的とする。地域・世代間交流の実態を把握し、具体的事例を示しながら、デザインや管理目標との関連性を考察する。

## 2. 研究方法

### 2-1. みらいの福祉施設建築プロジェクト概要

2021年に日本財団が開始した助成プログラムで、今年で第4回目を迎える。このプログラムは「福祉施設が地域づくり・まちづくりの核となること」を目指し、事業実施団体と設計者が協働して地域に開かれた建築事業プランを募集するものである。

### 2-2. 調査概要

本研究では、「みらいの福祉施設建築プロジェクト2021」助成決定事業6事業のうち利用が開始され地域の入りが見られる幼老複合施設「深川えんみち」を研究対象とし、①設計者・事業者へのヒアリング調査と②利用実態調査の2つの調査を行った。調査概要を表1に示す。

### 2-3. 深川えんみちについて

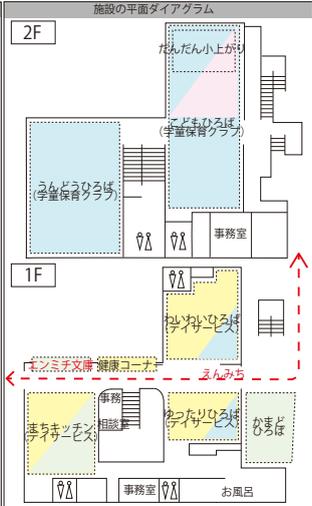
施設概要を表2に示す。1階にデイサービス（以下「デイ」）、2階に学童保育（一部乳幼児の子育てひろば）を配置した複合型の福祉施設

である。空間的特徴として建物内に「えんみち」と呼ばれる通り抜けの通路が引き込まれ、地域利用を促進させる要素として私立図書館「エンミチ文庫」が計画されている。また、それぞれのプログラム同士が空間をタイムシェアすることにより他世代間交流を生み出すことがプログラムされている。

表1 調査概要

調査①	調査方法	ヒアリング調査
	調査内容	事業者・設計者へのヒアリングを行った。ヒアリングはあらかじめヒアリング内容を項目化し、ヒアリングの中で掘り下げていく半構造化インタビューを行った。
	質問項目	① 目指した施設はどのようなものですか。（施設を利用する人たちにとってどのような環境・サービス像を作りたかったか） ② 地域に開くために、地域と利用者を繋げるためにどのような工夫がされていますか。 ③ 地域に開放することについてのリスクについてどう考えられていますか？また、どう対処していこうとされましたか。
	調査日	2024/5/23
調査②	調査方法	利用実態調査
	調査内容	・利用者、スタッフ、地域住民の動線・特徴的場面記録 「活動内容」「活動場所」「家具」「人物特性」を15分おきに平面上にプロットを行った。
	調査日	2024/7/22・31・10/3 計3日間

表2 深川えんみち概要

施設名称	「深川えんみち」	
施設サービス	1階・一般型デイサービス：定員23名/1日 認知症対応型デイサービス：定員12名/1日 2階・私立（共同自主）学童クラブ：約135名 ・子育てひろば（小学校の長期休暇など休日は近隣の区民館で実施）	
事業実施団体	社会福祉法人聖教福祉会 NPO法人地域で育つ元気な子	
設計者	JAMZA一級建築士事務所	
所在地	東京都江東区	
助成金額	282,790,000円	
構造	鉄骨造 地上2階建	
敷地面積	431.93m <sup>2</sup>	
建築面積	258.39m <sup>2</sup>	
延床面積	523.44m <sup>2</sup>	
生活プログラム		
1階	えんみち文庫（まちキッチン） 閲覧 貸出 到着後手洗い 入浴 機能訓練 健康チェック 自由時間 昼食 食後休憩 プログラム活動 おやつ 帰宅 親子食堂イベント 地域利用など	
2階	学童クラブ 平日 子育てひろば 子育て支援（2Fと3Fひろば） 読書・勉強 朝の会 自由時間 or イベント 昼食 読書 イベント or 昼寝 自由時間 おやつ 帰りの会 自由時間	
施設の平面ダイアグラム		
2F	だんだん小上がり 子育て支援（2Fと3Fひろば） 学童保育ひろば 読書・勉強 朝の会 自由時間 or イベント 昼食 読書 イベント or 昼寝 自由時間 おやつ 帰りの会 自由時間	
1F	えんみち文庫 まちキッチン 親子食堂 地域利用など	
利用終了次第終了 子供達が帰りに終了		

Actual Conditions of Community Interaction at a Facility Supported by the  
“Mirai no Fukushi Shisetsu Kenchiku Project” — A Case Study of Fukagawa  
Enmichi, a Complex Facility for the Elderly and the Young —

Rino SUGASAWA and Teruki YAMAGISHI

### 3. 地域に開かれる福祉施設の事業者と設計者の取り組み

設計者、事業者ヒアリングの内容を表3に示す。質問①の回答から目指した施設像は、「利用者・地域住民の居場所のない人々にとっての居場所」「多世代・地域交流を図り自助努力できる関係性」「施設然としない地域が気軽に入れる場所」であり、質問②からは、空間的実現方法として「えんみち文庫」の仕組み作りが重要であることがわかった。外から内部の様子が見えることで人とつながりを感じられ、自然と人が引き寄せられる。従来の閉ざされた福祉施設とは異なり、南北に通り抜ける構造を持ち、開放感を意識している。また、狭いスペースが密なコミュニケーションを生み出し、自然に挨拶や会話を生み出している。

また、質問③の見守りに関する回答からも、従来の施設の閉鎖的な環境とは異なり、大通りに面した大きな開口部や地域との日常的な交流による効果が確認できた。これにより、利用者に安心感を与え、「何かをしなければならない」という不安感を軽減し、認知症による施設外の徘徊を抑制するとともに、職員の見守り負担を軽減していることが明らかになった。さらに、「顔の見える関係」「地域の目で見守る」といった回答からは、過度なセキュリティの必要性がないと考えている。

### 4. 地域に開かれる施設の職員の見守りについての考察

施設内のスタッフの居場所を15分おきにプロットし、重ね合わせたものを図1に示す。滞在が最も集中する場所を確認すると、1,2階ともにキッチン周辺であることが確認できる。昼食やおやつ準備、洗い物などで利用されるため、キッチンはスタッフの滞在時間が長くなり、見守りに適した場となっていると共に施設内を見守りやすい配置が重要であると考えられる。

また、利用者がキッチンに自ら立ち手伝いをする姿やキッチンに向かって話しかける様子も頻繁に見られたことから、こうした配置は施設感や圧迫感を軽減する効果があると考えられる。

スタッフの行動が利用者活動空間全体で分散して見られることから利用者と共に活動しながら見守る形が機能していることが確認できた。

また、事務室などの管理空間でのスタッフ滞が見られるが、利用者の施設内活動前後や活動が活発ではない時間に集中することから、管理部門からの監視機能が重要視されていないことが考えられ従来の施設型から大きな変化が見られた。

表3 事業者・設計者の取り組み

<p><b>① 目指した施設はどのようなものですか。(どのような環境・サービス像を作りたかったのか)</b></p> <p><b>事業者:</b>利用者をはじめ、地域の方々にとっても居場所のない人の居場所となる。これまでの福祉施設のように、個々の個性を考慮せず集団的な取り組みを行ってきた体制ではなく、やりたいことや得意なことを自由にできる環境を提供し、やりたいことは無理に参加せずに過ごせるように、個々を尊重したサービスの充実を図る。</p> <p><b>事業者:</b>高齢者や学童の先生以外の大人と自然に関わることで、子どもが広範な人々と接点を持つ機会を作り、非常に有益な環境を目指した。学校では得られない多様な経験を積むことができる点を重視しており、受け身のサービスではなく、地域全体の子どもたちを支える環境づくりを目指している。また、デイサービスの利用者も参加し、自助努力を促す関係性を築くことが重要であるとする。</p> <p><b>設計者:</b>学童の小学生とデイサービスの高齢者が、日常的に顔を合わせる環境をどう作るかが主題。福祉施設っていつもの自体が施設前になってしまうと、「なんか入りにくいな」と思われがちだから、「楽しそうだし、ちょっと入ってみようかな」と思わせる雰囲気大事。施設をできるだけ意識的に道に対してなるべく多く開いたり、自然な素材を使った空間にすることで、「施設っぽさ」をなくし、地域の人が気軽に足を踏み入れたいくなる場所を目指した。</p>
<p><b>② 地域に開くために・地域と利用者をつなげるためにどのような工夫がされていますか。</b></p> <p><b>事業者:</b>課題ではあるかな。今十分じゃない正直。これまで関わりが薄かった人々を地域の一員として捉えようと、まだ課題が残っている。これからどのように進め、地域の人々に興味を持ってもらうかが重要である。「えんみち」がどのような役割を果たし、どんな可能性を持つのかは未知数だが、想像以上のものがあると感じる。地域に必要とされる役割を担って、アップデートし続けていこうと思っている。</p> <p><b>事業者:</b>施設づくりにはかなり地域の皆さんにも手伝ってもらっている部分はあって、みんなで床の塗装塗りとか塗ったり屋上のタイルも保護者の後に皆さん一緒に貼ってもらって何も全部作ってもらった。</p> <p><b>設計者:</b>「えんみち文庫」を取り入れることで、外から中の様子が見え、オーナーや人々のつながりがわかりやすくなり、人が自然に集まりやすい仕組みを作っている。「えんみち」は南北に抜ける構造で、物理的にも通風的にも風通しがよく、閉鎖的な福祉施設とは違った開放感がある。狭い空間だからこそ密なコミュニケーションが生まれ、訪れた人同士が自然に挨拶や会話を始める場になっている。広すぎるや管理が大変になるが、この規模感がアットホームな雰囲気を生み、ちょうどいいバランスが取れている。急に多くの人を集めるのではなく、地域や関係者との自然なつながりを重視し、顔の見える関係が徐々に広がっていくのが理想的と考えている。今もこうした良い関係が少しずつ育ちつつある。</p>
<p><b>③ 地域に開放することについてのリスクについてどう考えられていますか？また、どう対処していこうとされましたか。</b></p> <p><b>事業者:</b>開めたから安全であるとは限らない。職員、地域の目で見守る。</p> <p><b>事業者:</b>認知症の高齢者の徘徊への対策として、鍵をかけて閉じ込めるのではなく、人が集まる場所を作り、自然の見守りができる環境づくりを重視した。地域全体に見守りの意識を広げ、「あの人が歩いていこう」と気づいた人が声をかけたり連れ戻すようなつながりが期待していた。また、必要に応じてアラームの設置も検討したが、実際には徘徊が見られず、アラームは使われなかった。徘徊の背景には、施設の広さや周囲が静かでも起こらないことによる不安感があると考えられる。「扉はなまきゃ」「向かいなまきゃ」といった集りも要因になる。一方、この施設は、外の光や開放感、賑やかな人の動きによって安心感を得やすく、利用者が活動に参加している実感を持っているようになっている。さらに、外からの視線を感じられる環境が、利用者の立ち歩きにもつながっている可能性がある。</p> <p><b>設計者:</b>えんみちの中央やデイサービスの部分に建具を設置し、まちキッチンを開放する際には奥に入りすぎないように仕切りを設けている。しかし、この仕切りは完全なセキュリティを目指したのではなく、流れを緩やかにする仕組みで、施設運営によって「顔の見える関係」を築くことで、過度なセキュリティに依存しない状態が理想とし、その前提で設計されている。</p>

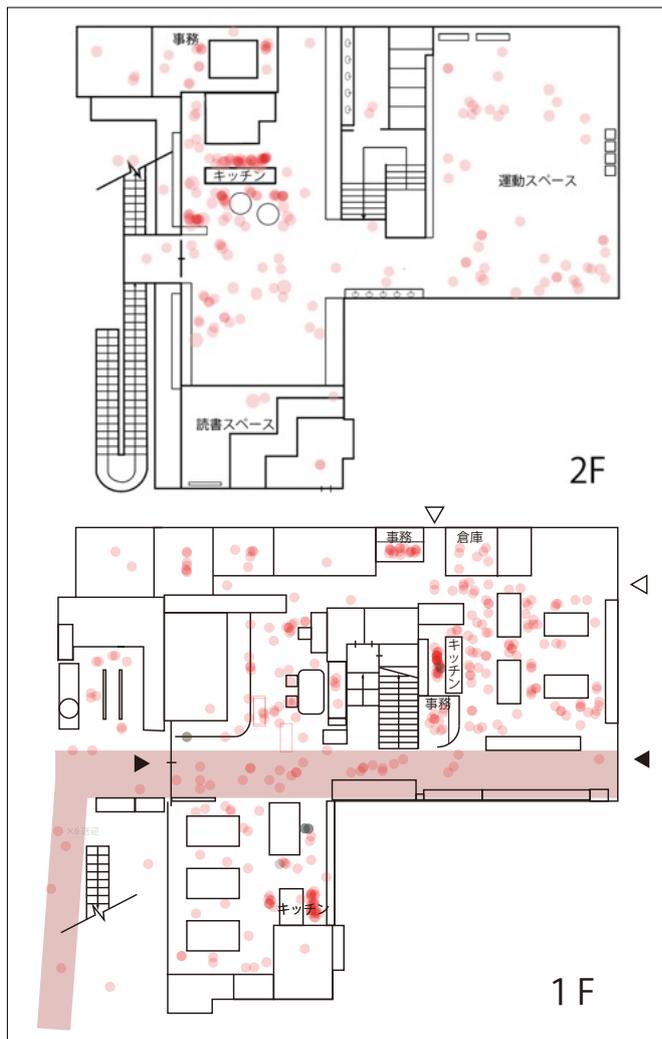


図1 施設スタッフの行動プロット図

## 5. 施設内での地域交流の実態

地域利用・地域交流については、2階では見られず、1階で図2のような姿を確認することができた。2-aのようにデイサービス空間に地域住民が入り込む形では、えんみちが中間領域的空間となり、利用者活動空間へ交流が流れていることがわかる。また、2-bのようにデイサービス利用終わりにはイベント利用に使用され、地域利用・交流が見られた。その際、学童の子供も準備に参加する様子が見られ、空間のタイムシェアの効果で様々な交流の形を生んでいると考えられる。

また、3章で大通りに面した大きな開口部の開放感が利用者へ安心感を与えるとの効果を述べたが、図2-cの場面のようにデイ利用者が窓越しから地域住民との交流を行う様子が見られ、地域交流を大きく促進させる効果も確認できた。また、交流が生まれる場面では付近で自然にスタッフが見守りをおこなえる体制が計画されていると読み取れる。

特に、地域利用を促進させる要素として計画された私立図書館利用者は1日平均3組程度見られた。その際高齢者が挨拶・声をかけるといった地域交流の様子が多く見られた。(図2-d)しかし、現在運営はボランティアによって行われているがスタッフの常駐できる体制がまだ整えられていないため、今後の課題になっていることがスタッフヒアリングから明らかとなった。そのため、私立図書館地域利用に関してはもっと活発的な利用が今後図られる可能性が見られた。

## 6. 学童とデイ利用者の他世代間交流の実態

児童と高齢者の他世代間交流について図3に示すような姿を確認することができた。最も多く見られた場面は3-a,3-Aのような児童が施設外から2階への移動のために「えんみち」を通り抜けする際に高齢者と挨拶を交わす場面であった。

また、一番交流の密度が高かった場面として確認できたのは、3-b,cのようなデイ送迎時の学童利用時の入れ替わりのタイミングであった。3-c,3-Cでは、学童のプログラムとして外部講師を招き、1階で学習を行なっている様子だが、このような環境は、他世代間交流を生み出すことに加え、ごちゃ混ぜの空間が学童の子供達に社会的促進の効果を与え、学習効果を向上させると考える。デイ利用者にとっても毎日異なる小学生の活動の様子が非日常感を提供しているのではないかと考える。

中間領域的空間が地域利用を引き込むことに加え、他世代間交流を促進し、日常的にさりげない交流空間としても機能していることを確認することができた。その他に、「宿題の読み聞かせをデイの利用者に聞いてもらう」「施設内の飾り物を一緒に工作する」「流しそうめんやかまど広場でのピザ作り体験などの施設でのイベント」を通し共に活動する多世代交流の実態が職員のヒアリングから確認することができた。

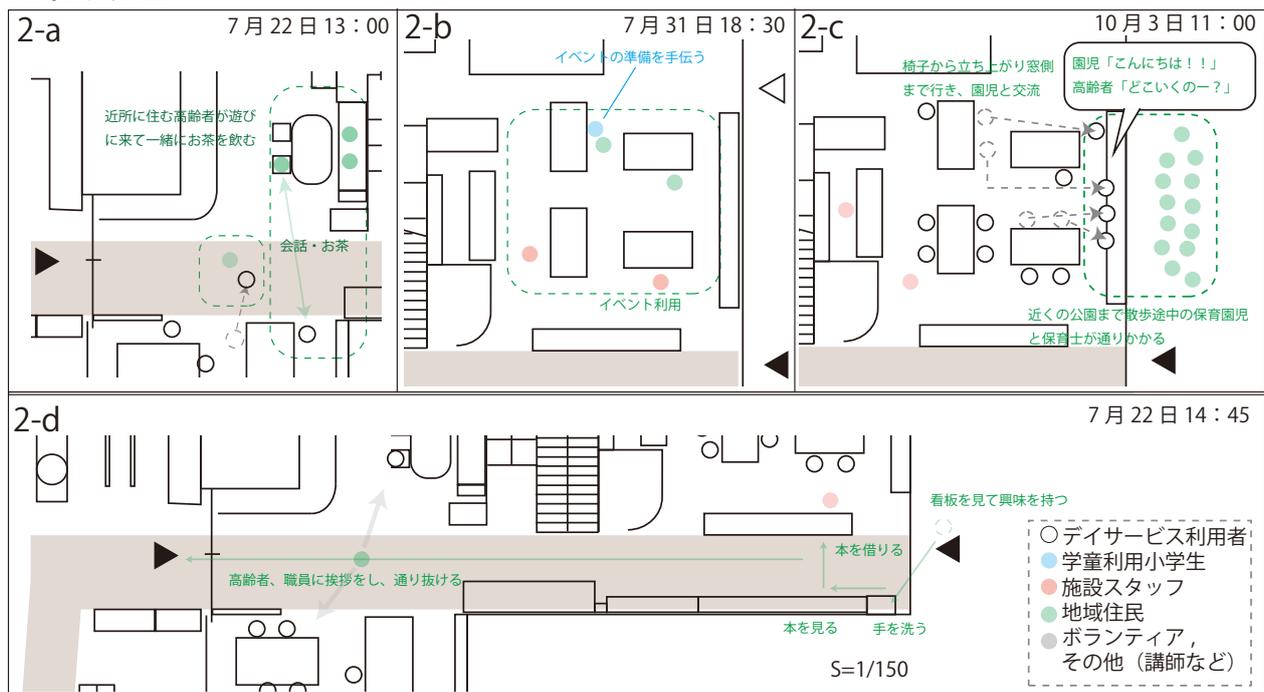


図2 活動中に見られた特徴的場面（地域利用・地域交流について）

## 7. まとめ

以上のことから、地域と施設の自然なつながりを意図した「深川えんみち」では、日常的に地域が施設内に入り込み、事業者や設計者の意図に沿った形で交流が育まれていることが確認できた。この地域交流は、空間的および運営的に計画された自然な見守りの形によって生み出されていると考えられる。

学童とデイサービス利用者の関わりについては、挨拶程度の軽い交流が多く、密なコミュニケーションはあまり見られなかった。しかし、別々の空間で異なるプログラムが実施されているにもかかわらず、日常的な交流が見られることから、外部空間から施設内へと引き込まれ、施設全体をつなぐ中間領域が顔見知りの関係性を構築するために非常に効果的であると考えられる。

## 参考文献

- 1) 日本財団:日本財団みらいの福祉施設建築プロジェクト2021(2021) <<https://fukushikenchiku.jp/archive/2021/>>2024/10/1
- 2) 一般社団法人 日本建築学会 編 「ケア空間の設計手法 地域に開く 子ども・高齢者・障がい者福祉施設」学芸出版社 (2023) p8-11
- 3) 深川えんみち:深川えんみちホームページ(2024) <<https://fukagawa-enmichi.jp>>2024/10/14
- 4) 菅澤 梨乃 / 山岸 輝樹:「みらいの福祉施設建築プロジェクト」助成決定事業を対象とした地域に開かれた施設計画に関する研究:学術講演梗概集, 2023, pp. 389-390, 2023-07
- 5) 菅澤 梨乃 / 山岸 輝樹:みらいの福祉施設建築プロジェクトから見る施設の地域開放への計画に関する研究〈その2〉-助成決定事業の事業者・設計者へのヒアリングを通して-:学術講演梗概集, 2024, pp. 235-236, 2024-07

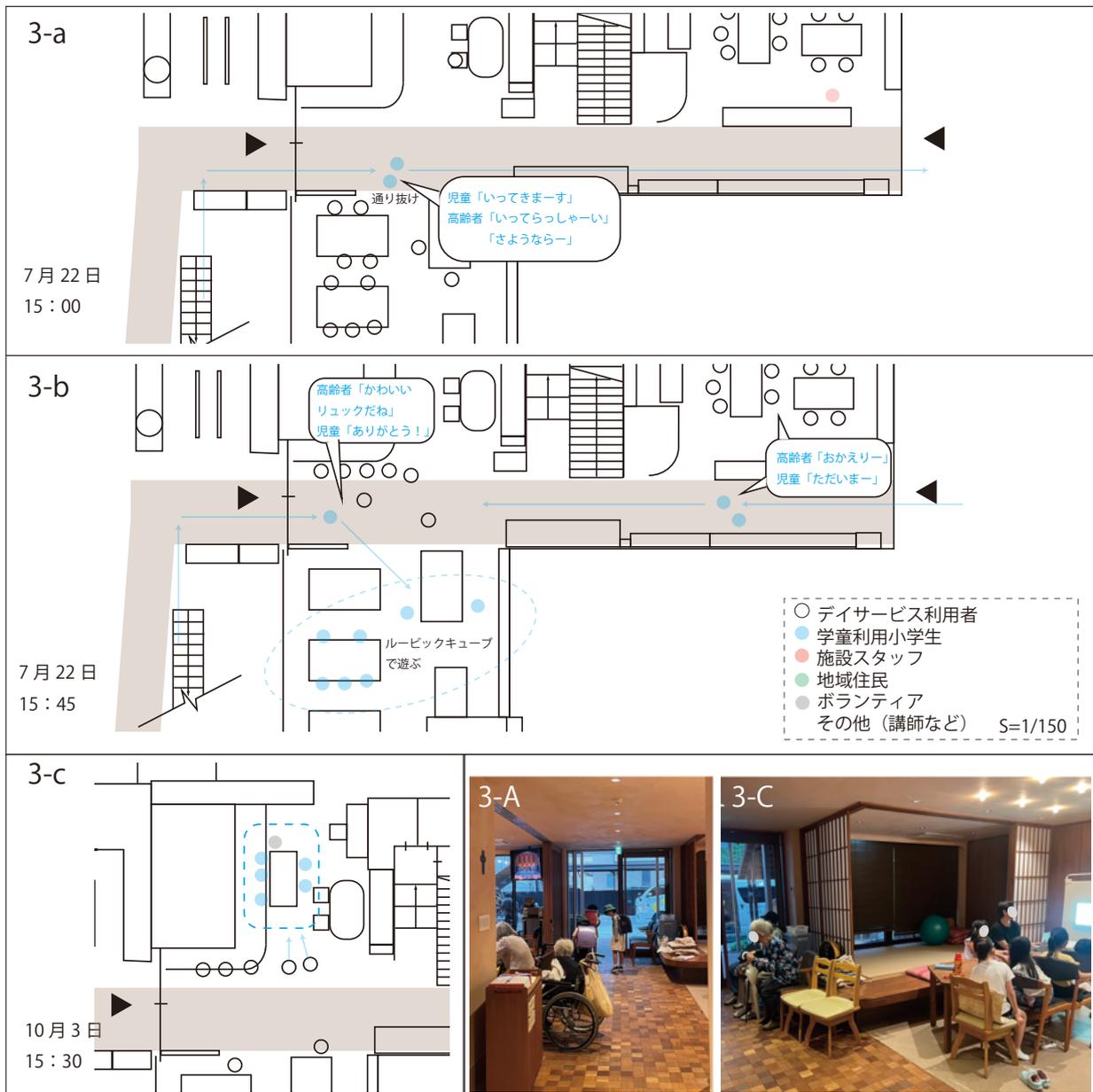


図3 活動中に見られた特徴的場面(施設内他世代間交流について)